

稲作発祥の地関係資料

鵜川町史 962頁

第七編 部落史

同三十一年、町議高橋藤一や小山利市らは、田浦簡易昇降場設置運動を開始し、三十四年十二月、浜田浦駅の実現となった。前年来鵜川・厚真間に早来バスの定期運行も始まっていたので、田浦地区の交通は画期的に便利になった。同三十九年から五カ年計画で毎年冬季間トラックによる客土事業が実施された。この土地改良事業により、この田浦地区一帯は美事な水田地帯に生れかわった。

なお、田浦の入鹿別川を挟んだ対岸厚真町内鹿沼に開拓中の酪農パイロット組合の過半数の組合員は、田浦在住の農家である。

三、二 宮

明治二十五年の春、札幌の大江常三郎が日高で馬を買った。鵜川の宿でその馬に逃げられ、足跡をたどって探すうちに仁立内(今の二宮)へはいった。うっそうとした原始林が農耕に適した肥沃な土地であることを知って、一たん札幌へ戻ったが、さっそく私下出願をした。

翌二十六年、厚別から広島、福井両県出身の開拓民一二戸を誘って入地した。丸太の掘立小屋に、よし葺き、床板なしの大きな土間に焚火をして暖をとった。

一戸当り五町歩、成功期限五カ年で無償給付という道庁の貸付制度であった。さっそく伐木にかかったが、米食などは思いもよらず、芋・稗・野菜類が常食であった。現在の高橋勇の土地には水野重吉、前田賢三の土地に村田仙蔵、中川嘉一のとこに大江常三郎が居をかまえていた。その水野が厚別から渡島赤毛の種籾を手に入れ、約三反の水田をつくって五俵ほどの収穫に成功したが、このあたりの米作りののはじまりといわれる。

明治三十一年の大水害につづいて、翌三十二年は濃霧と冷害のため凶作、そこで斎藤吉太夫は单身稗種子

962

鵜川町史 442頁

第四編 産業と経済

2 東部地区

明治二十五年、仁立内の水野重吉が五反歩の水田を造成し、反当り四俵の収穫を得たのが当町における水稲栽培の嚆矢といわれ、明治四十年には毛奈城の村井八三郎がヤチ水を灌漑して造田を行ない、七反歩の水稲栽培に成功したのが毛奈城地区の創始である。

明治三十二年の秋、生籠部落の明村京四郎・林千吉・中島惣太郎・楠木清吉らが協力して一反歩の造田に着手し、翌年の三月、種籾を栗山町の小島正八郎から購入して試作し、反当り三俵半の収穫を得たので、その後は同部落の水田開発が盛んになり、水車などによる灌漑が行なわれたりして水稲耕作が次第に広まっていった。

442

在一千町歩を超える美田をもっているが、これ十年の開拓の歴史を通して得た成果である。明街大通りが室蘭方面と浦河方面とを結ぶ幹線道下ムカワにあり、完成した大道は「シンミチ」々々で、新市街ができた頃である。

川東地区や、春日方面では沢の一部、二宮の沢